

# 有痛性の寛骨臼形成不全股において,その形態と関節症性変化の進行により関節唇は不安定化する

陸野 尚仁<sup>1)</sup>, 中川 晃一<sup>1)</sup>, 山岸 孝太郎<sup>1)</sup>, 橋本 晃明<sup>1)</sup>, 奥津 弥一郎<sup>2)</sup>, 後藤 公志<sup>1)</sup>

1)近畿大学医学部 整形外科学教室

2)京都大学医学部附属病院 整形外科学教室

## はじめに

関節唇損傷に対する鏡視所見の分類

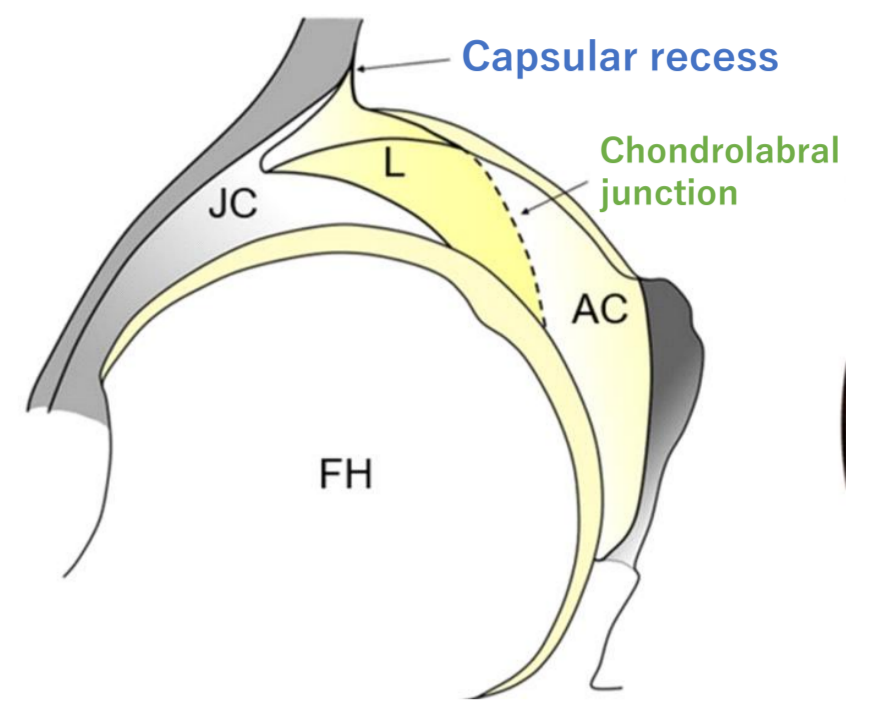
- ◆Lage分類
  - Etiological Classification
  - Morphological Classification
- ◆MAHORN分類
  - Labral Tears
  - Chondral Lesions of the acetabulum excluding the rim
  - Chondral Lesions of the acetabular rim

### 寛骨臼形成不全(以下DDH)股

股関節唇がhypertrophic, Chondrolabral junctionの破綻が多いため, DDH股の重症度を正確に反映できない

DDH股における股関節の重症度を正確に評価するため, 2020年にYoon分類が提唱された

Yoon PW, PLoS One, 15, 2020



### Yoon分類

	Chondrolabral junction	Capsular recess	Labral stability
1	Delamination	Intact	Stable
2	Disrupted	Intact	Stable
3	Disrupted	Disrupted	Unstable
4	Disrupted	Disrupted	Displaced

## 目的

有痛性DDH股をYoon分類で分類し, 患者背景因子,鏡視所見,X線画像パラメーターと関節唇不安定性との関連性を調査する

## 対象と方法

2014年から2023年に有痛性DDHに対して,CPO直前に股関節鏡視を行った43股

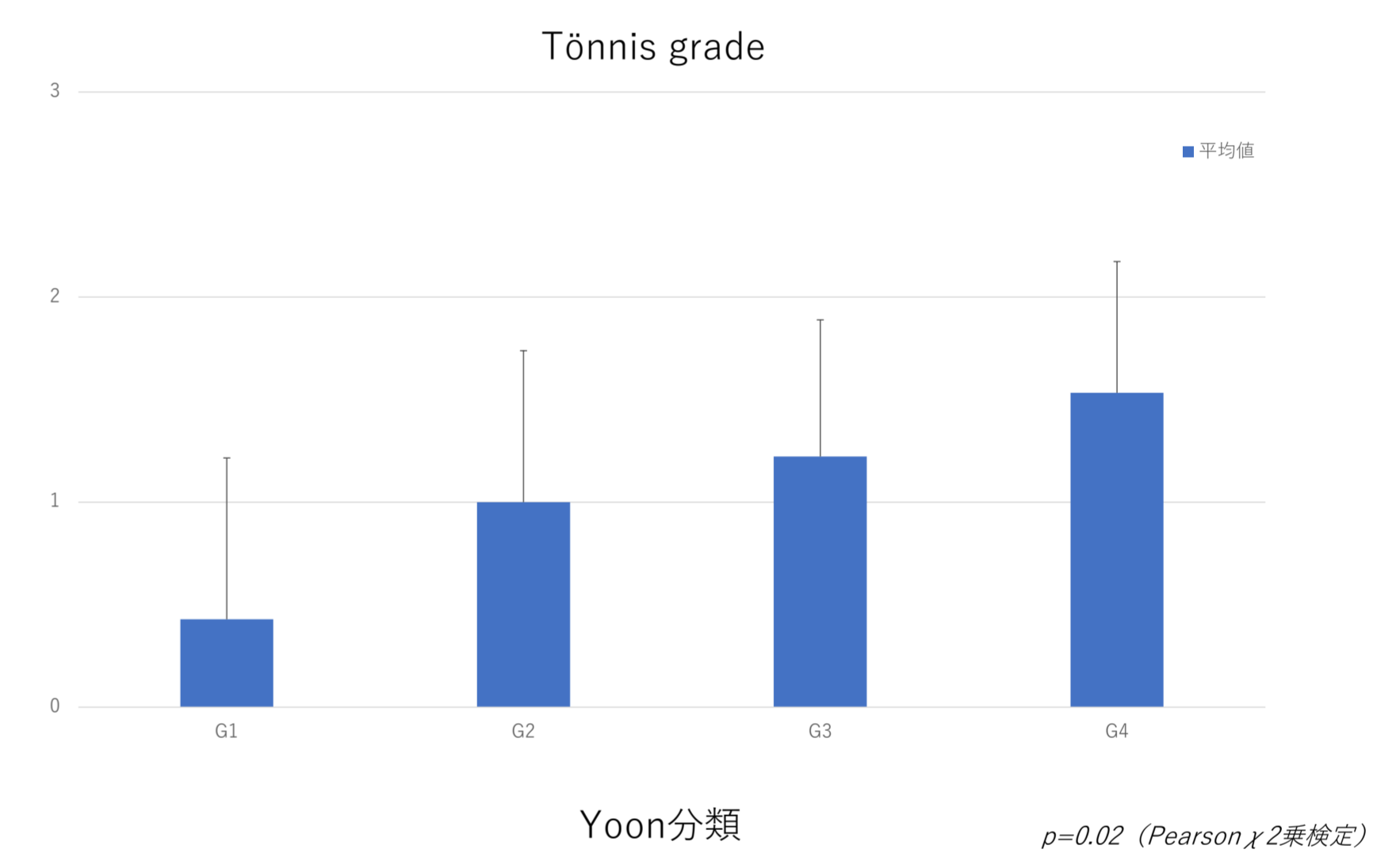
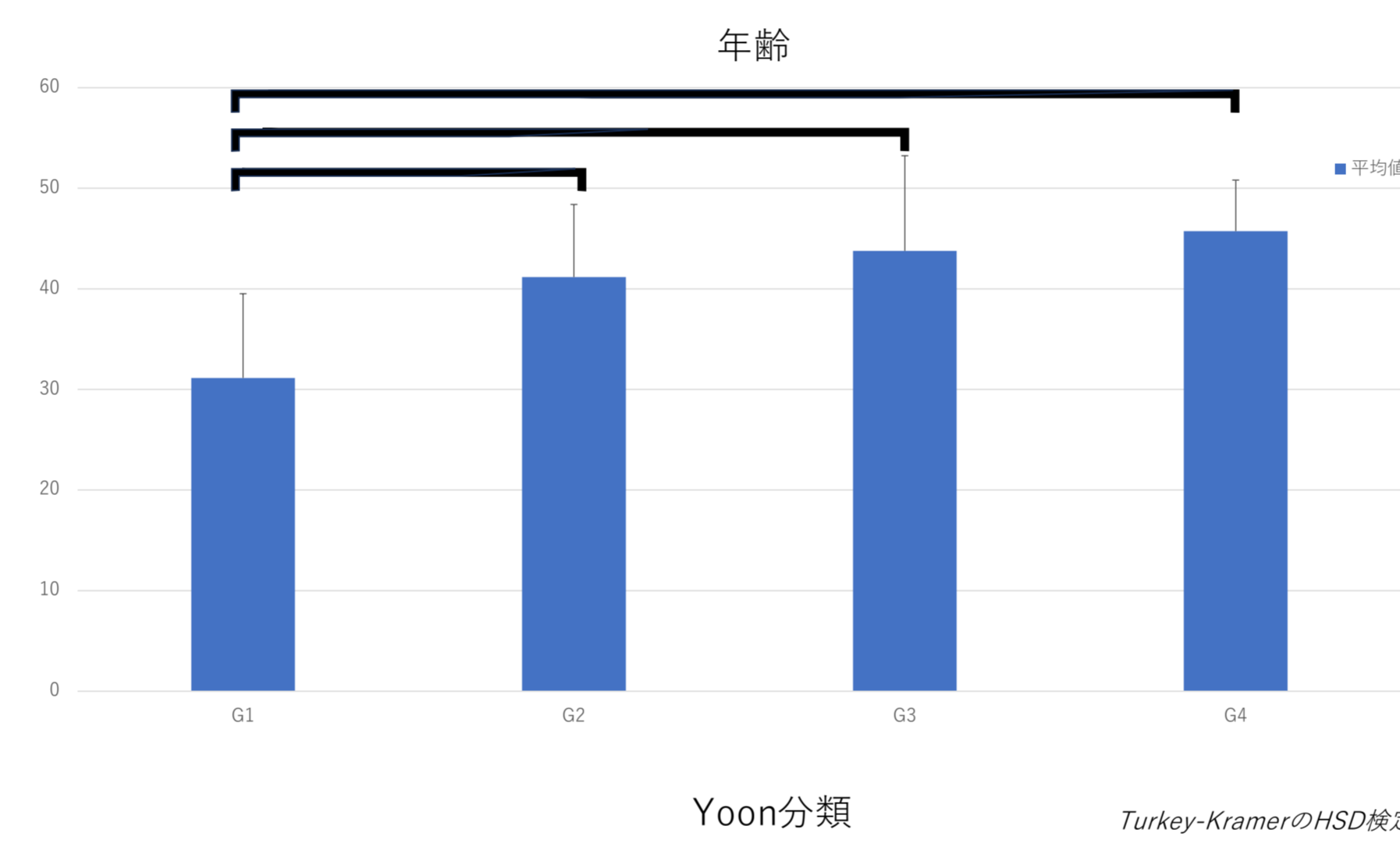
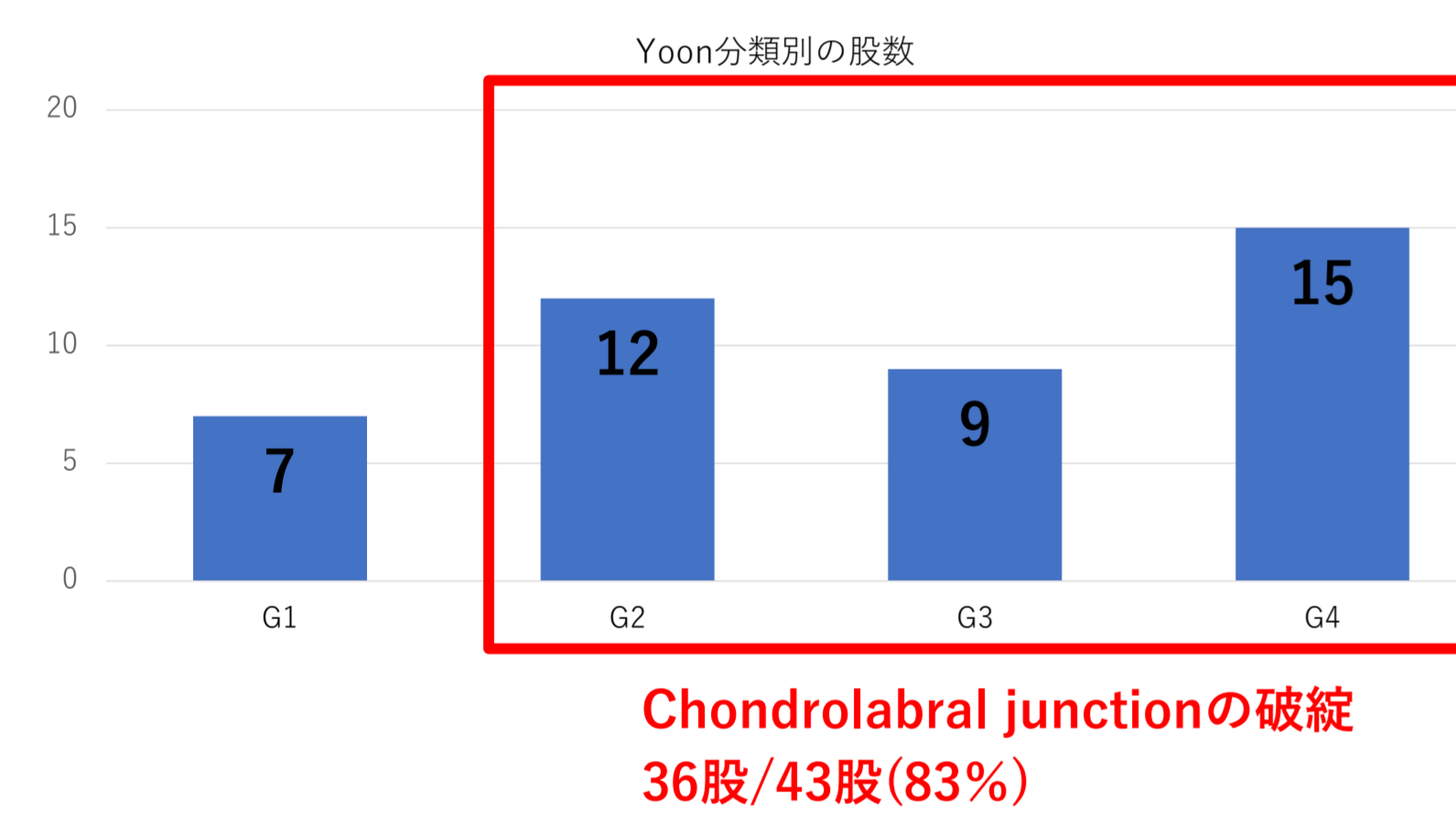
手術時年齢: 21~54歳 (41.7±8.6歳)

男性2股 女性41股 計43股

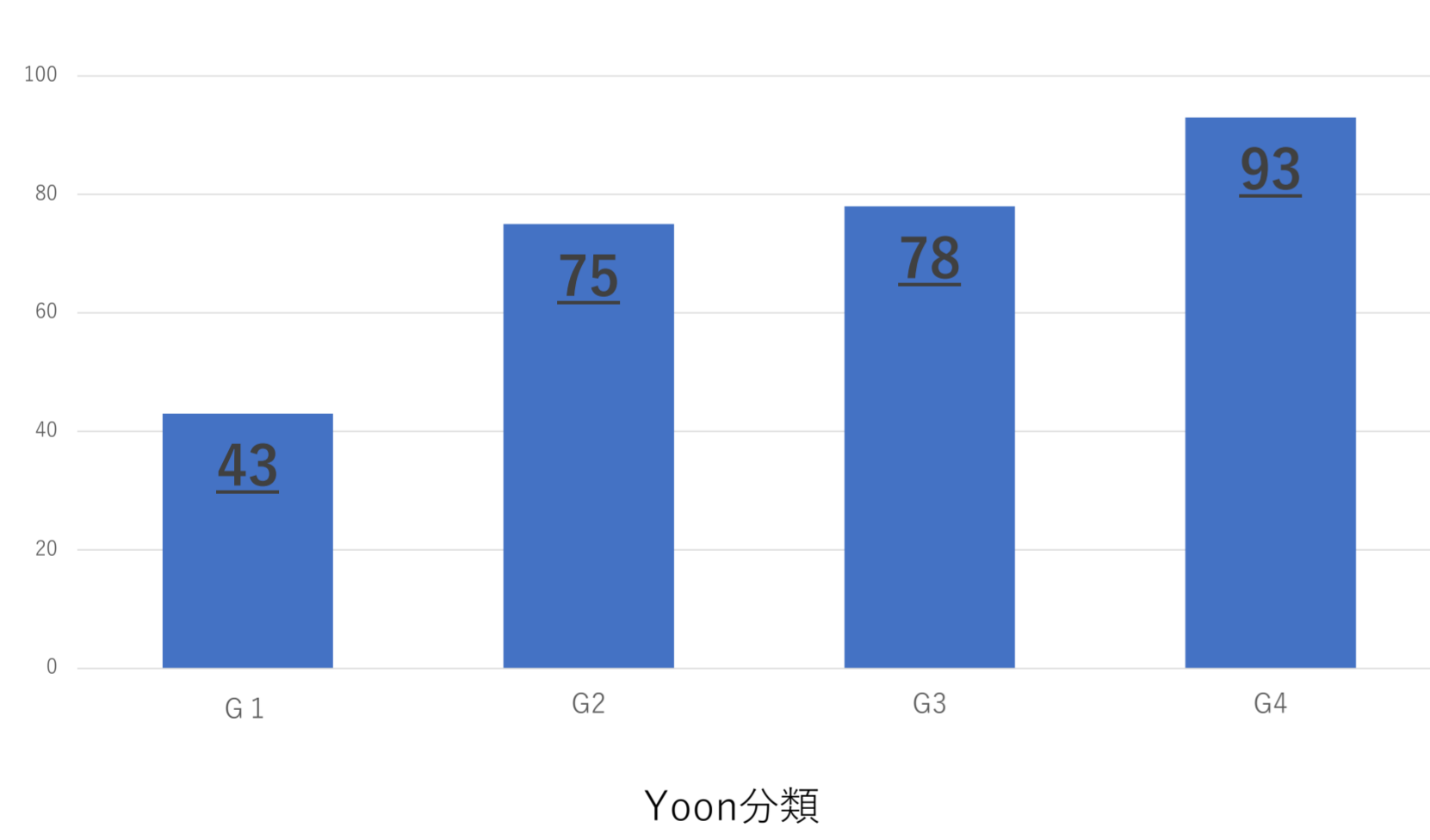
BMI: 17.9~31.3 (22.7±3.0)

関節症性変化: Tonnis grade 0:10例 1:17例 2:16例

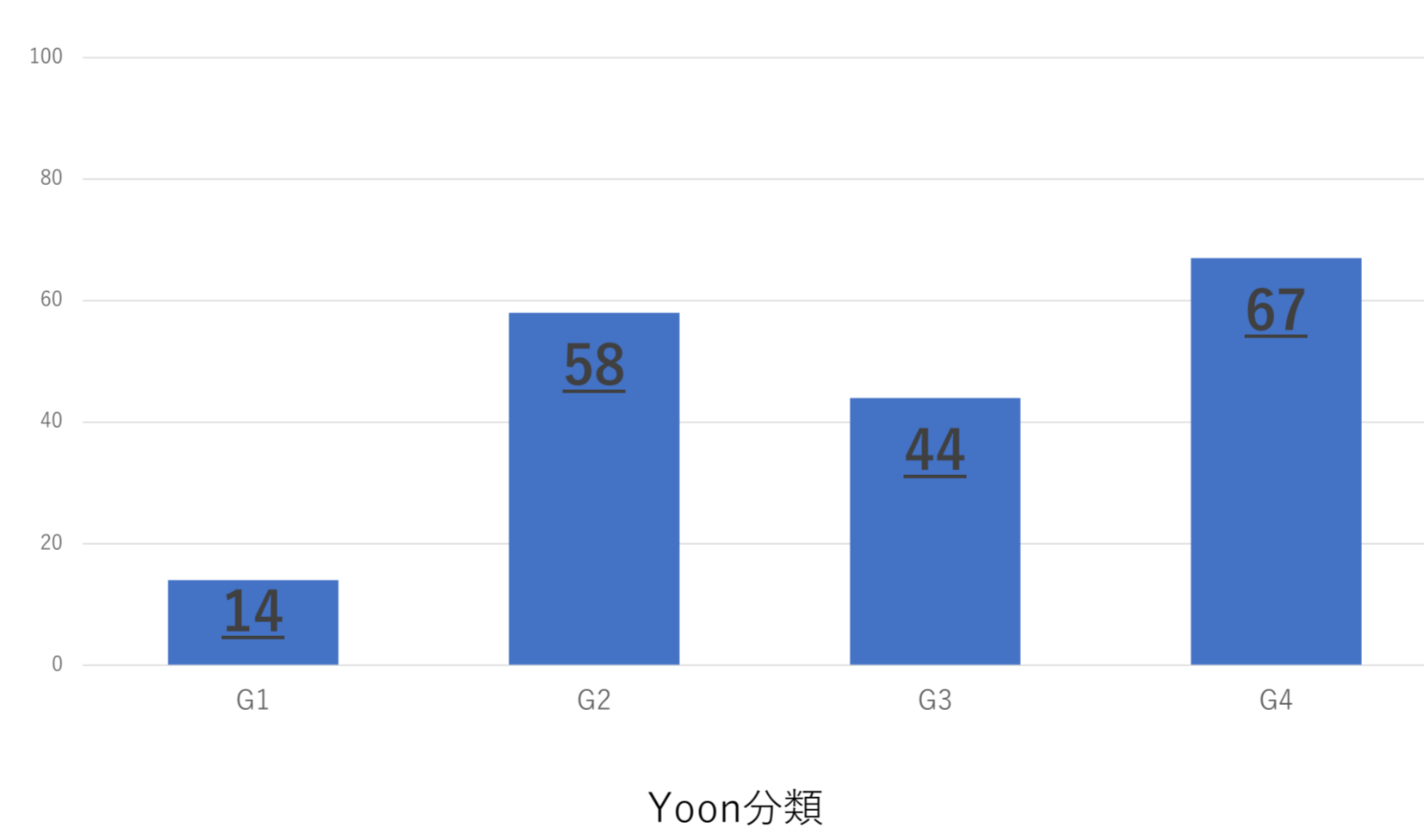
## 結果



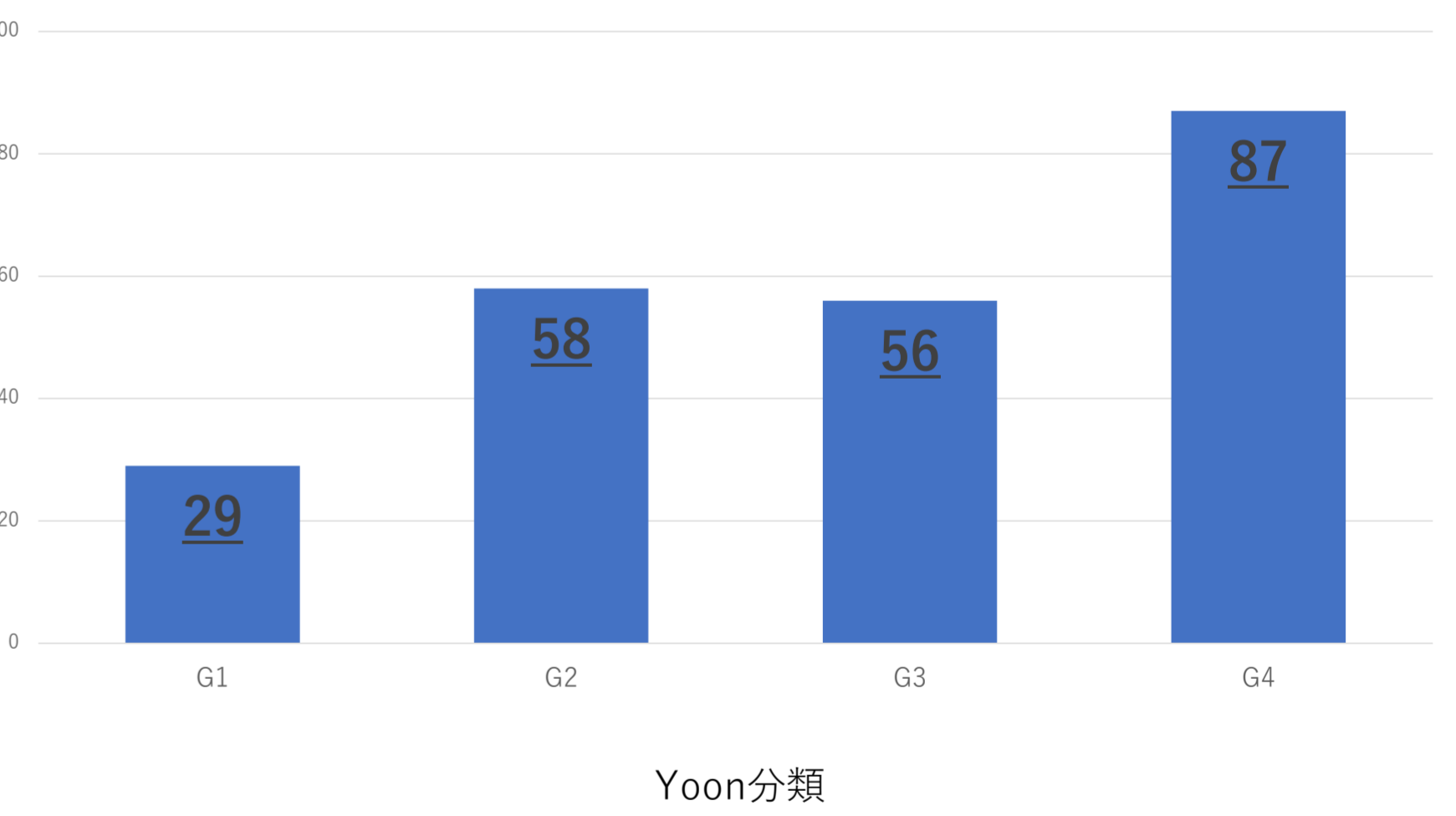
白蓋軟骨損傷の割合(%)(Outerbridge分類 grade2以上)



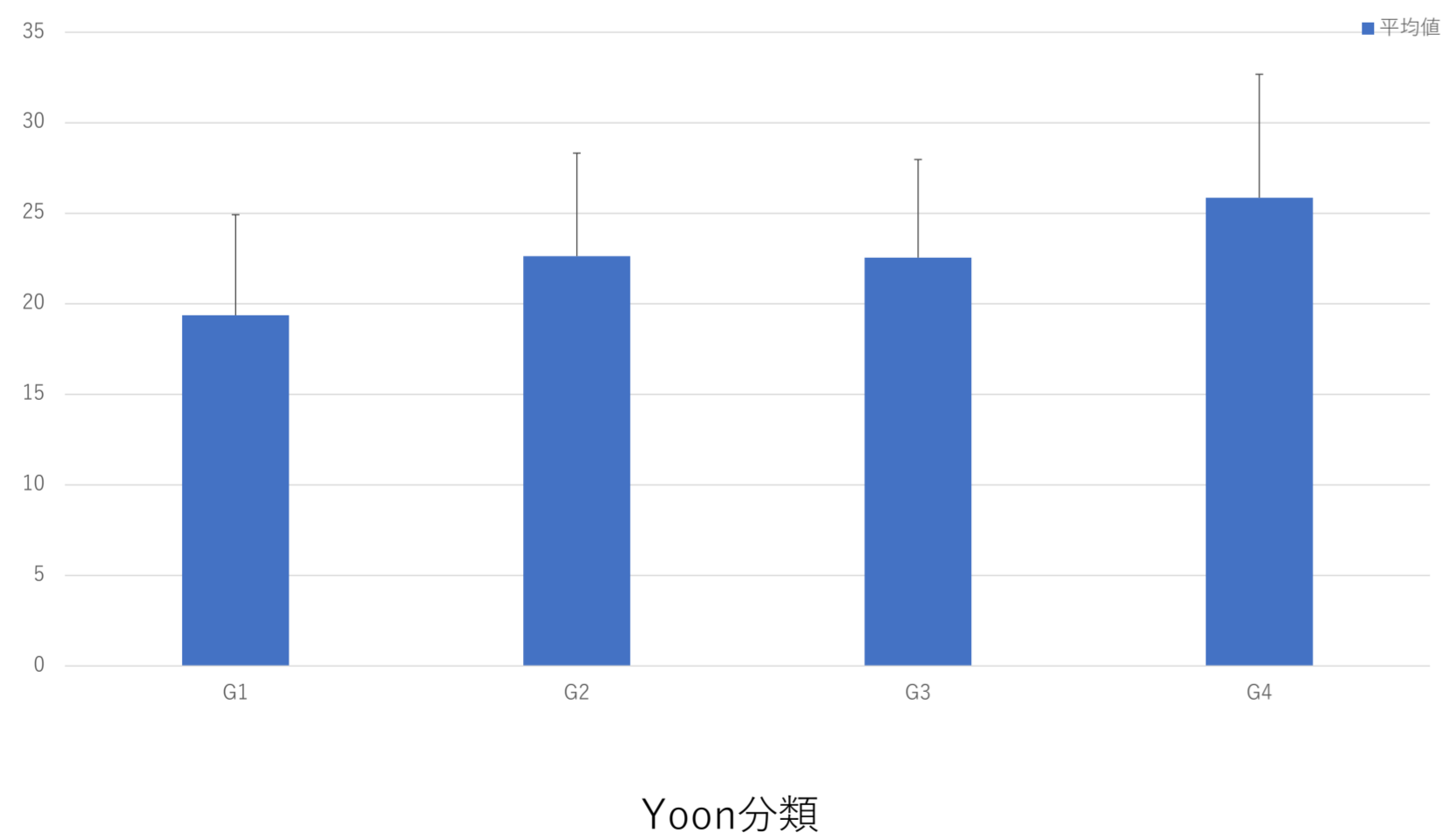
大腿骨頭軟骨損傷の割合(%)(Outerbridge分類 grade2以上)



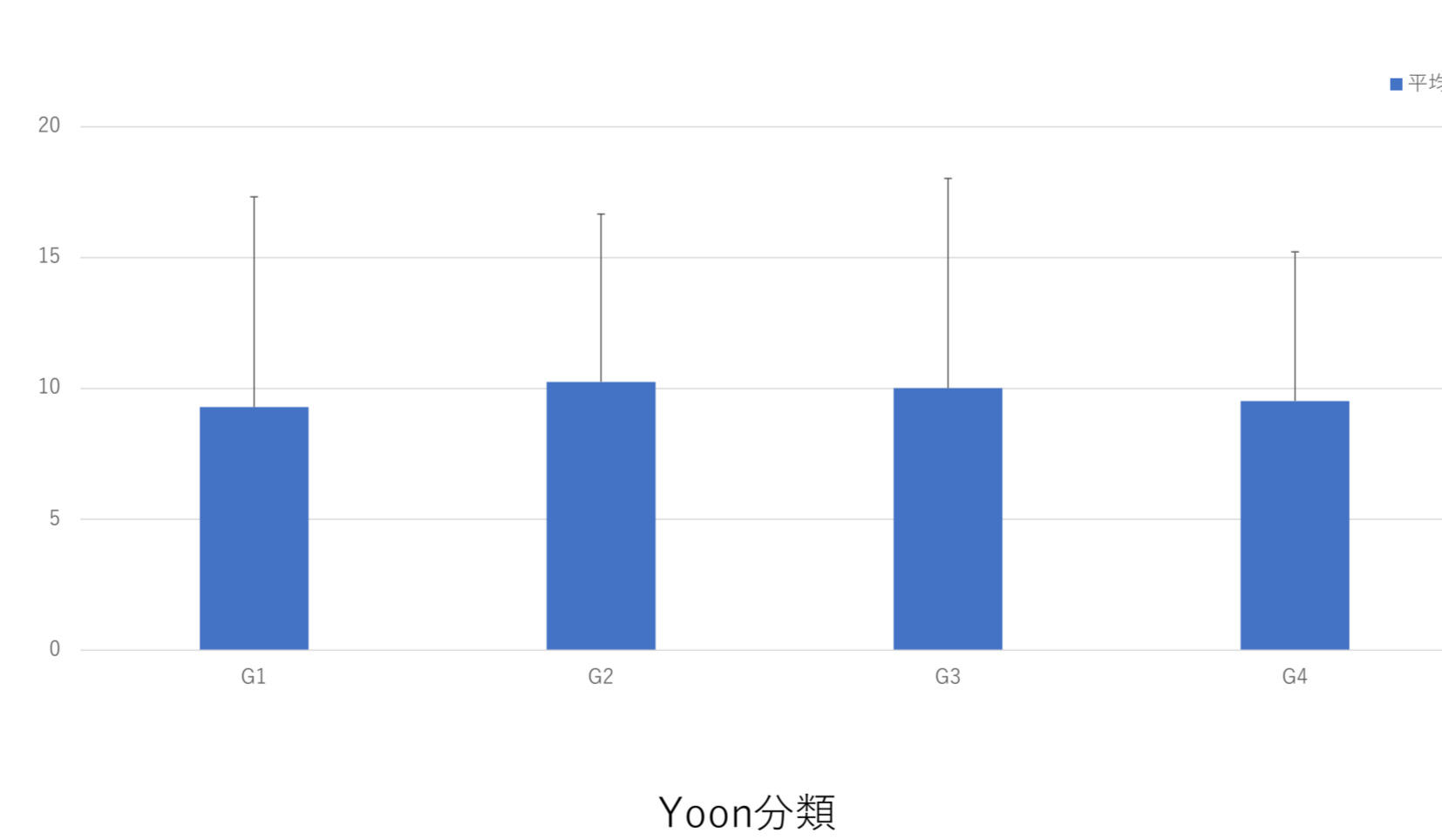
LT断裂の割合(%)



ARO(度)



CEA(度)



## 考察

Yoon分類進行と関連があったのは

- ◆手術時高齢
  - ◆Tonnis gradeが進行
  - ◆白蓋,大腿骨の軟骨損傷
  - ◆骨頭靭帯断裂
  - ◆ARO高値
- 関節症性変化の進行
- DDHの形態的特徴

関節症性変化の進行,DDHの形態的特徴は関節唇の不安定化と関連していると言える

## 考察

- ①DDHと変形性股関節症進行には正の相関を認めた  
Lievense AM. Ann Rheum Dis. 2004
- ②正常股の関節唇は全荷重の1-2%がかかるのに比し, DDH関節唇では4-11%の荷重がかかる  
Henak CR. J Biomech. 2011
- ③DDH股の関節唇損傷の重症度は大腿骨頭及び白蓋の軟骨損傷と正の相関を認めた  
Yoon PW, PLoS One, 15, 2020

## 結語

- ◆有痛性DDH股における関節唇は,hypertrophicでCLJ破綻を伴うことが多いため,従来の分類法でその重症度を評価することは困難である.
- ◆Yoon分類はDDH股の関節唇を評価するのに有用である.
- ◆関節症性変化の進行や,寛骨臼形成不全の形態的特徴により,関節唇が不安定化することが示唆された.

【利益相反:なし】 今回の発表に関連し, 開示すべき利益相反はありません